

百姓「いゝえ、それはいけない、小川へ行つて笹の中に水を一杯持つて来なければ、持つて来たらげよう」

それからモナチアは笹を持つて、牧場の小川へかけて行きました。そして笹の中へ一つばい水を入れました、けれど上へ持ち上げる、水は目からもつて笹は空つぽになつてしまひました。幾度しても幾度しても、水はちつとも汲めないで、笹は空つぽで持ち上がるばかりでした。

モナチア「あゝあゝ、どうしたらいいんだらう、水はちつとも笹の中に残りやしない、ね、どうしたらいいの」と、聞くと小川の上をとんで居た鳥が、鳥「おぬり、おぬり、泥でおぬり」

モナチア「あ、さうだ、それは氣がつかかなかつた。」  
早速泥を一つかみとつて笹の目をすつかり塗りました、そして水を一ぱい汲んで百姓の處へ持つて行きました。

百姓は糞を一つかみ呉れました。

牛は糞を食べました。そして泉水を飲みました。泉水は石をぬらしました。

石は斧をとぎました。

斧は葦を切りました。

モナチアは葦を持つて大急ぎでかけて歸つて来ました、早くマナチアの手を結かうと思つて。

けれど、食ひしんぼうの、マナチアはもう皆葡萄を食べてしまひました。そしてお腹がはちきれしてしまひました。(ケルトお伽噺)

### ○小さい黒蟻

或る處に小さい黒蟻が居ました。或朝、眞黒なお顔をよく洗つて、澤々したきれいな黒い着物をきて、氣持よくきれいに掃除をした家の窓のそばに坐つて居りました。

やがて窓のそばを大きな牡牛が通りました。そして、

「おはやう、きれいな黒蟻さん、あなた僕の嫁さ

んになつて下さいませんか」と云ひました。すると蟻は

「さあまづ第一番に私の氣に入らなければだめですよ」と云ひました。牡牛が大きな聲でモウとなきましたら、小さい黒蟻は両手で耳を仰へて、

「大きな牡牛さん、あなたは御自分の道をさつさとあつちへいらつしやい」と云ひました。やがて犬がまた窓のそばを通りました、そして、

「おはやう、きれいな黒蟻さん、あなた僕のお嫁さんになつて下さいませんか」と、云ひました。すると蟻は

「さあまづ第一番に私の氣に入らなければだめですよ」と云ひました。犬は力のある強い聲でワンと吠えました。小さい黒蟻はあわて、両手で耳を抑へた、

「まあ、亂暴<sup>ガッ</sup>な犬さん、あなたは御自分の道をさつさとあつちへいらつしやい」と云ひました。その次には猫が通りました。そして、

「おはやう、きれいな黒蟻さん、あなた僕のお嫁さんになつて下さいませんか」と云ひました。小さい黒蟻は

「さあまづ第一番に私の氣に入らなければだめですよ」と云ひました、ニャアと猫は大そう長くなきました、小さい黒蟻は両手で耳を抑へて、

「まあ、いやなお猫さん、あなたは御自分の道をさつさとあつちへいらつしやい」と云ひました。それから又窓のそばを豚が通りました。そして、

「おはやう、きれいな黒蟻さん、あなた私の嫁さんになつて下さいませんか」ときゝました。

「さあ、まづ第一番に私の氣に入らなければだめですよ」と蟻が云ひました。豚は口の中で早口につぶやきました。それをきいて黒蟻はまた両手で耳をふさぎながら、

「太ちよのお豚さん、あなたは御自分の道をさつさとあつちへいらつしやい」と、云ひました。

其の次には鼠が窓のそばを通りました。そして、

「おはやう、きれいな黒蟻さん、あなた僕のお嫁さんになつて下さいませんか」と云ひました。

「さあ、まづ第一番に私の氣に入らなければだめですよ」と云ひました。鼠はやさしくチウ〜と云ひました。小さい黒蟻はにこ〜して、

「鼠さん、私はあなたのお嫁さんになりませう」

と、云ひました。翌日立派な御婚禮があつて、皆が、「おめでたうございます、おめでたうございます」と云ひました。それから後、或日のこと、奥様の黒蟻が、

「鼠さん〜、私は一寸お寺参りに行つて來ますが、留守の間スープをかきまはして居て下さい。

それからきつと柄の長いさじでかきまはすことを忘れないやうに。」と云つて出かけました。鼠さんは小さい黒蟻の奥様が云た事をよく覚えて居ませんでした。そして短かい柄のさじでかきまはしましたから、すぐに、ポチャツと、鼠さんはスープ鍋の中に落ちて沈んでしまひました。奥様の黒蟻

は夕方歸つて臺所へ行つて見ると、この始末。まあ、どうしたらいいんでせう、小さい奥様の黒蟻は戸口の處に坐つて泣き出しました。そして御飯もたべず、いつまでも〜泣いて居ます。そこへ聲のいい小鳥がとんで來てうたひました。

「小さい〜黒蟻さん、

何がそんなに悲しいの、

話してごらん黒ありさん。」と。

「可哀さうな家の鼠さんがスープの中へ沈んでしまつたのです」と、小さい黒蟻が云ひました。

「ぢや私は嘴を切つてしまはふ」と小鳥が云ひました。

「小鳥さん〜どうしてあなたは嘴を切つてしまつたの、わけを話して下さいな」と、班の鳩が云ひました。

「可哀さうな鼠さんはスープ鍋の中に沈んでしまつて、小さい奥さんの黒蟻は何もせず泣いてばかり居るのですもの」と小鳥が云ふと、

「それなら私は尾をめちや／＼にしてしまふ」と班の鳩が云ひました。そして小屋に飛んで歸つた時、鳩小屋が

「まあ鳥の中で一番きれいな鳩さん、どうしてあなたは立派な尾をそんなにめちや／＼にしたのです」と聞きました。

「可哀さうな鼠さんがスーブ鍋の中に沈んでしまつて、小さい奥さんの黒蟻は何もせずに泣いてばかり居るのですもの、そして歌の上手な小鳥は嘴を切つてしまつたのです、だから私は尾をこんなにしたのです」と聞いて、鳩小屋が

「ぢや、私はひつくりかへりませう」と云ひました。

きれいな噴水の水が鳩小屋のひつくりかへつたのを見て

「鳩小屋さん、どうしてあなたはひつくりかへつたのですか理<sup>か</sup>をきかせて下さいな」と云ひました。

「可哀さうな鼠さんがスーブ鍋の中に沈んでしま

つて、小さい奥さんの黒蟻は何もせずに泣いてばかり居るのですもの、歌の上手な小鳥は嘴を切つてしまふし、尾のきれいな班鳩は大事な尾をめちや／＼にしてしまつたし、だから私はかうしたんです」と聞いて、きれいな噴水は

「ぢや、私はどん／＼あふれて流れて海の方まで、遠い海の方まで行きませう」と、云ひました。そこへ王様の姫様がいらつして、きれいな噴水に、「なせお前はそんなにどん／＼あふれるのか」とお聞きになりました。

「可哀さうな鼠さんがスーブ鍋の中にしづんでしまつて、小さい奥さんの黒蟻は何もせずに泣いてばかり居るんですもの、そして歌の上手な小鳥は嘴を切つてしまふし、尾のきれいな班鳩は大事な尾をめちや／＼にしてしまひました、それで私はかうしてどん／＼あふれてあの深い青い海へ流れて行くのです」と、噴水が云ひますと。

「ぢや、私は水さしを壊さう」とお姫様はおつし

やいました。かうして、

お姫様は大事のくの水さしを壊しておしまひになり、

きれいな噴水は青い海の方へどんくあふれ出し、

鳩小屋は道ばたにひつくりかへり、

班の鳩は立派な尾をめちやくにし、

歌の上手な小鳥は嘴を切てしまひました。

それは皆、可哀さうな鼠がスープ鍋の中に沈んだから。そして小さい奥さん黒蟻が何もせず泣いてばかり居たからです。(イスパニアお伽噺)